隠れ水俣病

<2>

13人を新認定

「長い、長い二十数年でした。三度目にやっと認められて、ホッとしました」と半永一喜さん(当二)―水俣市八の窪―はおだやかな顔に、ほんのわずか微笑を見せた。

くずれた神話

朝水俣公害被害者認定審査会(会長・徳臣晴大教授)は四月二十二日、半永さんを含む十三人を新しく水俣病と認定した。発生から十数年もたった今日、いまなお十三人もの大量認定がなされるということ自体、水俣病の底知れぬ深さと広がりを示している。

水俣病をめぐる数多い神話のなかの一つに、二十八年―三十五年発生説がある。発生期間をこの八年間に固定してきたことが、多くの潜在的な患者たちの掘り起こしを妨げてきた。

だが、こんどの十三人の認定で、二十年ごろから手足のしびれを訴えていた半永さんや、三十六年発病の田中徳義さん(昨年七月、六十三歳で死亡)が認定されたことで、水俣病の発生期間は、従来の八年間から、一挙に十六年間にひろがり、長い神話はくつがえされたのである。

二十年ごろから手足のしびれがあったと主張してきたばかりに、二度も認定を見送られ、こんどやっと日の目を見た半永さんの場合はこうだ。

20年からしびれる

半永さんが、父親の多良喜さん(一昨年、七十二歳で死亡)とともに、漁業専業になったのは終戦直後のことだが、親子ともに漁が好きで、戦前からさかんに一本釣りやボラかご漁をしては魚を食べた。

「漁民の方から奇病は出してどぎゃんする。商売がなりたたん。奇病じゃなか。馬からつこけてなったとオヤジはいつも言いよらした」―腕のいい漁師だった父親にとって、むすこの病害にかかったが、首をひねるだけ。奇病さわぎが大きくなり、水俣の魚が売れなくなる過程で、父親の多良喜さんはむすこが奇病であることをがんこに拒否した。

「百間港から恋路島の七ツ瀬付近でよう釣りよった。タコ、キスゴ、タチ、ボラ。魚が好きで、魚なしではいっときもてけん。家内がカキうちが上手で、毎日食べたもんな」

ところが二十年十月ごろから「手足がしびれ、目はかすみ、ボヤーッとなった」という。医

20数年ぶりに水俣病と認定された半永さん

発生を８年繰上げ

３度目にやっと認定

奇病を恥じた漁師気質

は孫にあたる、半次さんの二男一光君が胎児性患者として、三十七年に認定されるに及んで、がんこ者の多良喜さんもついに

折れ、半次さんの認定申請を認める。だが、二十年発病は最後までたたった。

「あのとき早く申請しとけばね。すまんだった」―多良喜さんは死の床で半次さんの手をとってあやまったという。その多良喜さんも生前、典型的な水俣病症状を見せていたということで、未解剖のまま火葬に付されたことが惜しまれる。

死ぬまで認めぬ

田中徳蔵さんは、半次さんと同じ専業漁民。多良喜さんとは親友の仲だった。二十二年、大連から引き揚げてきて、すぐ漁師になった。タイのハエナワからイカ釣り、タコつぼ、タチウオ釣り、なんでもやった。

「百間港の排水のドロドロするところに餌をつないで、脚までつかって仕事をしていた。あそこにつないどくと虫がこんというて。清廉なら年に三回は消毒せなんとこだけど、不思議に虫がこんかった。魚が好きで、三度三度大さらで食べとりました」と妻のフジノさん(六)。

病名一つ知らなかった田中さんが、急におかしくなったのは三十六年夏のことだ。どうも足がかりが鈍いというので、市民病院へ行くと血が濁っているといわれ、薬をのんだが直らない。いらい病院をいくつも転々としたが、そのつど病名がかわり、最後には老衰といわれた。二度出した認定申請も、生前にはついに認められず、死後期大で解剖してはじめて水俣病とわかったのである。

歩行困難、よだれ、精神障害など典型的な水俣病症状を示していた田中さんだが、最後まで奇病ということを本人自身認めようとしなかった。「くされ魚は食いよらん。わがとって来て人にも食わせといて、たとえ口がさっても奇病といわるるか」が生前の口ぐせだったという。「病院で、奇病なら奇病として早く手当てしてください。発表して部会が認めれば金もいらん。証文も書くというけど、ウソともスンともいいなはらん。解剖するときも最初は手算がなかけん火葬せろというて、役所も医者もぐるになっとる」とフジノさんは怒る。ここでも三十六年発病が認定のカベになっていたことは否めない。

だが、こんどの大量認定で、一つの神話はくつがえされた。恐るべき有機水銀汚染の時間的、地域的広がりのデータは、少しずつ厚みを増しつつある。発生から十数年、水俣病はいぜん多くのナゾを秘めたままだ。行政は、医学は一体なにをしていたのか―。

メモ

◇新認定者　四月二十二日の審査会で認定されたのは昨年六月の審査会で認定されず、「要観察」となっていた十六人を再審査した結果、十三人が水俣病患者と認定された。審査会は半次さんの発病を二十年と公式に認めたわけではないが、半次さんを認定したことで、発生上限が二十年ごろまでさかのぼることになる。また田中さんの認定で、三十五年終了説も破られた。なお死後解剖で認定されたのは田中さんで六人目。